

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

May
2022

5

植木鉢屋三代
水川製陶所訪問記



植木鉢屋 三代

水川製陶所訪問記

姿かたちはシンプルな極致、しかし植物の器としてこれほど優れたものはない。

そんな常滑焼の植木鉢を専業とする水川製陶所は、
小さいながらも代々が「開拓」と「創造」の精神に富んだ窯元だ。



後列左から、朝顔鉢(三代)、初期の朝顔鉢(三代)、ラフポット(四代)、ランプシェード二種(五代)
前列左から、輸出用臍月鉢(三代)、藻掛け茶碗(初代)、玉斎南蛮水指(初代)

「窯屋」の雰囲気留める工場

シンプルな形、皆無もしくは最小限の装飾、どんな陶器よりも土を感じさせる色。そこに入れる植物が健やかに生育し、かつ際立つことだけを追究して辿り着いたかのような潔さすら感じさせる器、それが植木鉢だ。昭和五十年代の最盛期、常滑には鉢を手掛ける窯屋が約八十社もあり、全国の生産量の五〇%以上を占めるといふ圧倒的シェアを誇っていた。植木鉢もまた、常滑焼を代表する製品だ。

時代の流れで植木鉢のメーカーは激減し、今では常滑に二社のみ、そのうち専業としているのは水川製陶所ただ一社。常滑植木鉢の最後の砦である。

工場があるのは、かつて窯屋が密集していた地区の一つで、常滑市街の南部に位置する山方町。常滑西小学校前の市道を南下し、山方会館西交差点を左折すると、常滑では数少なくなった煉瓦の煙突が見える。それが水川製陶所の目印だ。

かつて黒煙を吐き出ししていた煙突はもちろん今は使われていない。しかし、ガス窯に火を入れた寒い冬の日の翌朝には、白い蒸気がここから立ち上る様子が見られるとか。

煙突ばかりでなく、年季の入った木造の工場自体が、往年の窯屋の雰囲気は今なお留めている。中に足を踏み入れると石膏型や製品が所狭しと積まれ、職人たちが忙しく立ち働いている。我々が訪れたのは、植木鉢屋がもつとも忙しい冬。なぜこの季節が忙しいかというところ、植木鉢の需要が高くなるのは花が咲く春で、そこに向けてフル稼働で生産されるからだ。

ここで働いているのは六人。水川幹康さん、父の博視さん、母のたつ江さん、祖父の清平さん、そして二人の従業員。清平さんは大正十四年（一九二五）の生まれの九十六歳だが、なんと今なお工場です仕事を続けているという。この日も、焼成が済んだ製品の出荷準備を、ガス窯の横に腰を下ろして黙々と行っていた。

水川製陶所の製品は主に二種類に分類できる。一つは「駄鉢（駄温鉢）」と呼ばれる赤茶色の器肌の植木鉢。これは分業による量産品で、水川製陶所では常滑市内の素地専門メーカーから素地（形成工程まで済んだ状態の器）を仕入れ、焼成のみを担っている。現在、駄鉢を生産するのは水川製陶所を含めて全国で四社ほどしかない。鉢底の裏面に「トコナメ」という銘があったらそれは水川製陶所の製品だ。少しでも植木鉢の産地のアピールになればと銘を入れているという。もう一つは朝顔鉢、山野草鉢、雪割草鉢、ラフポットといったさまざまなオリジナル製品。これらはデザイン、成形、焼成と工程の全てを自社で行っている。

工場の一階では、男性職人が石膏型から乾燥した自社製品の素地を取り出す作業に精を出し、二階ではたつ江さんと女性職人が、焼成前の成形過程の仕上げとして口縁や器面を篋で削る「面取り」に勤んでいた。今では貴重となった昔な

がらの工場風景が郷愁を誘うが、しかしここは単にノスタルジックな場所ではなく、ものづくりの最前線の現場である。

窯業史に名を刻む初代と二代目

水川家が窯業に従事するようになったのは明治五年（一八七二）。初代は嘉永四年（一八五二）生まれの玉斎（本名は茂右衛門）。玉斎は轆轤の技術に秀で、当時の常滑を代表する轆轤師として一目置かれる存在だったようだ。明治末発行の「常滑陶器誌」の名工を網羅したページにも登場しており、「火鉢、花瓶等の大物を作るに甚だ巧なり」と紹介されている。後継の育成にも熱心で、玉斎のもとには多くの弟子が集まった。常滑焼研究者の沢田由治は、玉斎について書いた文章の中で「常滑口クロ陶芸の中心勢力」「明治・大正・昭和時代の常滑陶業発展に大きな力となった影の功労者」と評している。

また、製品見本の開発や釉薬研

究を行う「常滑陶器同業組合模範研究所」にも所属していた。玉斎が発明した技法のひとつに、陶土に藁を練り込んで焼成することで器肌に独特の風合いを生じさせるというものがある。これは「玉斎南蛮」と呼ばれて後進に大きな影響を与えた。

二代目の茂一は、常滑で初めて駄鉢を製造した人物である。駄鉢は植木鉢の一種だが、植木鉢と聞いて多くの人が思い浮かべるのがこれではないだろうか。逆台形で、器面に装飾がなく、太くなった上部の口縁にのみ釉薬が掛けられた赤茶色のものだ。型を用いて成形し高温で焼き締めるので、割れにくく、通気性や排水性に優れ、重ねて運搬しやすく、量産できるので安価で提供できるという特徴がある。戦後、駄鉢は常滑焼の主力製品の一つになったが、その礎を築いたのが茂一だ。

その始まりは昭和四年（一九二九）。当時、鳴海製陶の前身の製陶所が植木鉢を生産していたが、生



年季の入った工場が、
現在進行形の歴史を語りかけてくる。

変わらないこと、変えないこと。
変わるべきこと、変えてゆくこと。

産品目の見直しで植木鉢から撤退することになった。その際、常滑で製造を受け継がないかとの話が常滑陶器工業組合にもたらされた。家業のかたわら常滑工業学校（常滑高校の前身）で指導にも携わっていた茂一は、組合の仲介でその製造技術を習得。品目の一つである駄鉢が従来の植木鉢よりも量産できることに注目すると、これを機に駄鉢生産に乗り出すことにした。茂一はその技術をオープンにし、駄鉢生産に参画したいという同業者にも指導する。また、瀬戸から型屋を招いて駄鉢の型を作らせもした。のちにこの型屋は常滑に移り、型起こしから焼成までの全工程を一貫して常滑でできる体制が整うことになる。

創ること、受け継ぐこと

轆轤の名手だった初代、常滑の駄鉢生産を牽引した二代目。そして、いま現場に立つ以後の三世代も、それぞれが先駆的な製品を手掛けてきた。

三代目で大正生まれの現役職人である清平さんは、昭和四十年代に「朝顔鉢」のスタンダードモデルを作った。これは、朝顔を盆栽のように鉢で育てるための専用の鉢だ。鉢植えの朝顔は名古屋で百年以上前に始められ、発祥地から「名古屋朝顔」と呼ばれる。その愛好家組織である名古屋朝顔会の依頼を受けて、浅かった従来の朝顔鉢を大幅に改良したものがそれ。丸みを帯びたフォルムと表面の施釉が特徴で、最大二十センチほどになる朝顔の大輪と瑞々しい葉を受け止め、色鮮やかな花を引き立てる。

四代目の博視さんが手掛けたのはラフポット。これは、スマートな土肌の植木鉢で、白クリームブラウンなどのカラーバリエーションがあり、

ナチュラルな風合いがいい。駄鉢は外に置くイメージだが、洗練された雰囲気の内装に置いておきたいデザインで、観葉植物を入れるのに最適な鉢だろう。博視さんは近年もクリームとブラウンを掛け分けた洒落た扇形の植木鉢を作っている。この道五十年の大ベテランだが、まだまだ新作への意欲は衰えていないように見える。

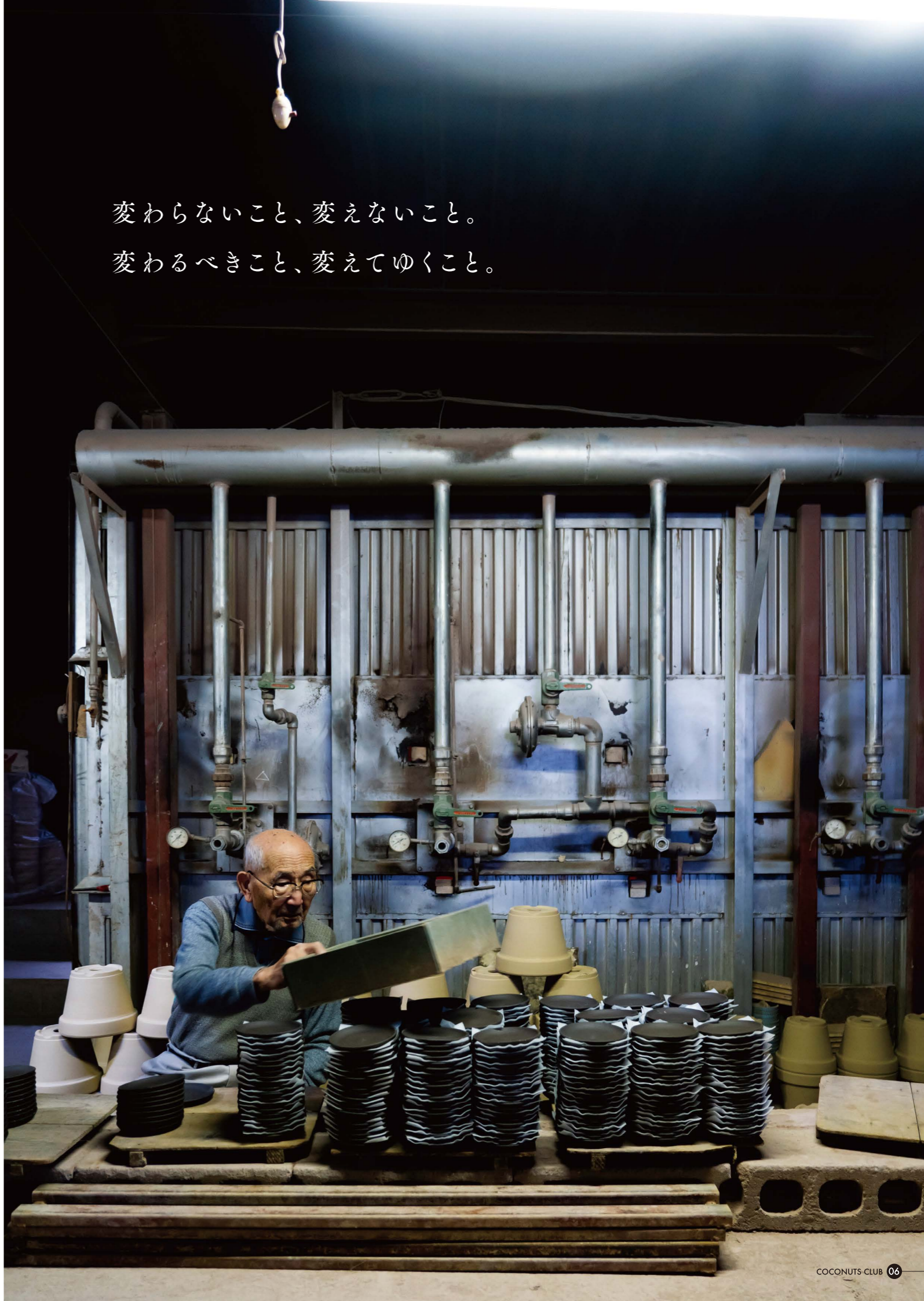
そして五代目の幹康さんが創り出したのは「陶華ランプシェード」である。

幹康さんのランプシェードは、一目見て植木鉢とわかる形が最大の特徴だ。陶製のランプシェードは今やさほど珍しい存在ではないが、植木鉢をベースにしたものはこれが唯一で、まさに植木鉢屋だからこの形である。器面にはさまざまな形の大小の穴がたくさん空いており、花、四葉のクローバー、雪の結晶、天の川や星の流れなどを描いている。中に明かりを入れると、美しい模様が闇の中にふわりと浮かび上がり、壁際に置けば穴から漏れた光

が投影されて幻想的な世界を描き出す。「二目見て植木鉢とわかる形」と書いたが、光が入った状態を先に見ると美しさに目を奪われて、逆に植木鉢の形だとは気が付かないかもしれない。

幹康さんが初めてランプシェードを作ったのは平成二十五年（二〇一三）のこと。かつて隆盛を誇った常滑の植木鉢も、輸入品やより安価で軽いプラスチック製品に押されて一九九〇年代初頭から需要が下がる一方という状態で、幹康さんも若い頃から常に危機感があった。「受け継いできた植木鉢の製造技法を活かしつつ、園芸とは違う分野に進出できる製品ができないだろうか」と、ずっと考えていました」と幹康さんは話す。そんな折、若手の職人で常滑焼のアート作品を競作するという企画が持ち上がり、幹康さんも参加することに。そこで、かねてより構想していた植木鉢型のランプシェードを制作したのである。

この年、ノリタケの森でのグルー



「でも伝統は守っていきます。だからランプシェードの形を壊すことはしませんよ」と五代目。受け継がれてきたのは技術と、そしてスピリットなのである。

こうして代々の足跡を追ってみると、創出の気風と地域愛が水川家のDNAのようだ。「新しいことはいくらでもやればいい、そう思っ

て息子を見ていました」と四代目。「でも伝統は守っていきます。だからランプシェードの形を壊すことはしませんよ」と五代目。受け継がれてきたのは技術と、そしてスピリットなのである。

こうして代々の足跡を追ってみると、創出の気風と地域愛が水川家のDNAのようだ。「新しいことはいくらでもやればいい、そう思っ

て息子を見ていました」と四代目。元を元気にしたいと、自主企画「知多半島幸せの光プロジェクト」をスタート。各地で行っている巡回展示が好評だ。

こうして代々の足跡を追ってみると、創出の気風と地域愛が水川家のDNAのようだ。「新しいことはいくらでもやればいい、そう思っ

て息子を見ていました」と四代目。元を元気にしたいと、自主企画「知多半島幸せの光プロジェクト」をスタート。各地で行っている巡回展示が好評だ。

こうして代々の足跡を追ってみると、創出の気風と地域愛が水川家のDNAのようだ。「新しいことはいくらでもやればいい、そう思っ

て息子を見ていました」と四代目。元を元気にしたいと、自主企画「知多半島幸せの光プロジェクト」をスタート。各地で行っている巡回展示が好評だ。

植木鉢ランプシェードの灯りに、町への思いが浮かび上がる。

